図書館からのメッセージ

フィンランドは、OECDが実施する国際学習到達度調査（PISA）で常にトップクラスの結果を出していますが、なかでも読解力の高さが際立っています。この理由については種々分析されていますが、世界トップレベルの国民読書量と無関係ではないでしょう。実際、図書館利用率は世界一といわれ、休日には家族で図書館に行き、読書をするといったお国柄だそうです。

新入生の皆さん、大いに本を読みましょう。もちろん、本は生涯を通じての師・友人となるものですが、圧倒的に豊富な読書時間がとれるのが学生時代です。青年期に触れた書物は豊かな栄養源となって、その後の人生の礎となるに違いありません。

そして、大いに図書館を使いましょう。専門性が増す大学での勉強を強力にサポートするのが、図書・雑誌・データベースといった図書館資料です。より密度の濃い大学生活を送るために、ぜひ図書館を生活の一部としてください。

図書館スタッフ一同、お持ちしています。

用途に合わせてカシコク使おう！

3館 合わせた蔵書

220万冊 総冊数

各館の蔵書にはそれぞれ特色があるので、利用目的に応じて使い分けて積極的に利用するのがお勧めです。

和泉図書館

特色　人文・社会科学の入門・基本図書

蔵書数　33万冊

最寄駅　明大前（京王・井の頭線）

日・祝はCLOSE

中央図書館

特色　人文・社会科学の基本・専門図書

蔵書数　147万冊

最寄駅　御茶ノ水（JR）

日・祝もOPEN

生田図書館

特色　自然科学・理工学農学の基本・専門図書

蔵書数　40万冊

最寄駅　生田（小田急線）

日・祝もOPEN

図書館の恋人

理工学部准教授　林ひふみ

その年、彼女は十四歳でした。翌年に高校受験を控え、授業以外の長い時間を、図書館で受験勉強に費やしていました。特に夏休みの間は、なんとか学習者用の静かな席を獲得しようと、毎朝早くから図書館の入口に並んだものです。

同じ学校のT君も、毎日図書館に来ていました。彼女は時々寝坊して、朝九時の開館に遅れそうになることがありました。そのたびに、T君は彼女の分の席を確保してくれていました。二人は隣あった席で勉強し、お昼になると一緒に売店で菓子パンを買って食べ、また夕方六時まで勉強します。閉館の音楽を合図に立ち上がり、「じゃあ、また明日」と挨拶をすると、それぞれの家に向かいます。二人の間には、好意のようなものがありました。

ところが、ある日、T君は図書館に姿を見せません。一日中、彼女の心にはぽっかり穴が開いたようでした。どうしたのかしら。何か用かな。それとも病気とか。彼女は不安でなりません。

翌日、T君は何事もなかったかのように、また図書館に現れました。前日どうして来なかったのか、何も話しません。彼女からも尋ねませんでした。二人はいつものように一緒に勉強し、昼には一緒にパンを食べ、いつもと全く同じです。でも、その日を境に、彼女の心の中で、何かが以前とは変わりました。

最初は彼女自身にも、全く理由がわかりませんでした。T君の顔を見ると、なぜだかのどが渇くのです。彼と話をすると、なぜだか心拍が速まるのです。彼の姿が見当たらないと、なぜだか不安になるのです。遠くから彼の姿を見かけると、なぜだか光輝いて見えるのです。こんなことは、今まで一度もなかったのに。

恋？

ふと思い至り、彼女はうろたえました。それまでにも、男の子を好きになったことは何度かありました。でも今回は、病気にかかったみたいというか、魔法にかけられたみたいというか、自分で自分の生理反応をコントロールできないのです。

彼女は慌てて書庫に駆け込みました。毎日図書館に来てはいましたが、書庫に入ったことはほとんどありません。中はとても静かで、ひんやりとしています。そびえ立つ書架の間で、彼女は少しずつ冷静さを取り戻しました。（もしこれが恋だとしたら、私はどうしたらいいのかしら。）書庫には何万冊もの本があり、恋愛についての本もたくさんあります。『恋愛論』『誰のために愛するか』……。彼女は題名に「恋」や「愛」の字が入っている本を、一冊また一冊と選び出すと、全部抱えて書庫の隅にある小机まで運び、ゆっくり読み始めました。

人生上の問題を解決するために本を読むのは、彼女にとって初めての経験でした。答えがみつかったかどうかは、何とも言えません。ただ一つだけ明らかになったことがあります。古今東西、多くの人が恋愛で悩んできたのです。決して彼女だけの特別な経験ではない、ということです。

本を読んだからといって、人は必ずしも賢くはならないし、美しくもなりません。二十何冊か恋愛についての本を読んだあげく、結局彼女は失恋してしまいました。図書館に来なかったあの日、T君は別の女の子とデートに出かけていたのです。

それ以降、彼女は何か悩みがあると、世界中どこの町にいようと、図書館か書店を探すようになりました。本を探して読んでも、答えがみつかるとは限りません。けれども毎回必ず、彼女は確認することができました。多くの人が同じ問題で悩んできたのだ、決して自分一人ではないのだと。

人生で一番辛いのは孤独感です。どんなに辛い時も、傍らに仲間がいれば、耐えることができます。けれども、ひとりぼっちでいたら、他人から見れば小さな問題でさえ、人生を滅ぼしかねません。十四歳の彼女は、新宿区立中央図書館で、T君のハートを獲得することはできませんでしたが、その変わりに生涯の恋人を得たのです。

この文章は、私が新井一二三という筆名で、台湾の少年少女向け新聞『国語日報』に連載したコラム「東京書迷録」の一編「図書館的恋人」の日本語訳です。（中国語の原文では「彼女」が「私」になっています。）コラムは一年間の連載終了後、『123成人式』というタイトルで一冊にまとまり、台湾そして中国で出版されました。約五十編のエッセイのうち、読者の反響が一番大きく、インターネットで繰り返し採録されるのが、この「図書館の恋人」なのです。たぶん国を問わず、多くの人が十代の頃、類似した経験を持つためでしょう。

振り返れば、十四歳の新宿区立中央図書館に始まり、これまでの人生を支えてくれた図書館、書店はたくさんあります。トロント大学ロバーツ図書館、北京三味書屋、香港青文書屋、台北誠品書店など。結論はいつも同じ、自分は一人じゃないんだ、ということ。私は図書館のある人生を歩むことができて、幸福だと感じています。明治大学の図書館がみなさんと生涯の恋人との出会いの場になることを祈ります。

（中文コラムニスト　新井一二三）